慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「大塚」史学における「二つの道」
Sub Title	
Author	豊田, 四郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1947
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.7/9 (1947. 9) ,p.510(144)- 547(181)
JaLC DOI	10.14991/001.19470901-0144
Abstract	
Notes	慶應義塾九十周年記念論文集 : 第一輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470901-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「大塚」史學における「二つの道」

豊田四郎

一、工業における資本主義の發達において、封建的生産様式から資本制生産様式への轉化の徑路、換言すれば小營業の段階からマニュファクチュアへの段階への資本制生産（産業資本）の展開が革命的で急速であるか、改良的で緩慢であるかということは、それとともに形成されつゝある直接生産者＝賃勞働者階級にとつてきわめて重要な意味をもつている。

なぜならば、封建的生産様式およびこれに照應する封建的イデオロギーの清算が根本的で徹底的であればあるほど、それは勞働者階級の社會主義のための斗爭にとつて、益々好都合な物質的精神的諸條件を與へるからである。これに反して、逆に封建的生産様式の殘存が資本制生産の發達を阻止しかつ緩慢ならしめ、プロレタリア化しつゝある直接生産者經濟的文化的政治的諸條件をながく野蠻な封建的な分散的な域につなぎとめておくことができればできるほど、それは資本家階級にとつて益々有利であるからだ。

それゆえ、マルクスにより「資本論」第三卷第四篇第二十章（註）で提起された封建的生産様式から資本制生産様式への轉化に關する二つの徑路の問題は、一つの國民經濟・産業部門における勞働者階級の社會主義のための斗爭に對する、具體的歴史的條件はどうか？　という觀點からみて、きわめて重要な方法的意義をもつ。

（註）　要點を引用すれば

「封建的生産様式よりの推轉は二重の經路からなされる。」第一「生産者は、農業上の現物經濟と中世的都會的産業のツンフト的に統合された手工業者とに對立して商人となり資本家になる。これ眞に革命的な經路である。」

第三、或はまた商人が直接に生産を掌握する。この種の經路は（例へば十七世紀のイギリス織物商が獨立材業者を自己の支配下においてから羊毛を販賣しかれらから毛織物を購買するという事實にみる如く）歴史的にはいかに推轉として作用するものとはいえ、それ自身においては舊來の生産様式を革命するものでなく、むしろこれを保存し、自己の前提として維持する。かくして、例へば十九世紀の中葉に及んでも尚、フランスの絹工業、イギリスのメリヤス工業及レース工業における製造業者は多くは單に名目上の製造業者たるにすぎず、現實の上では單に商人にすぎなかつた。かれは機織業者たちをして舊來の分散的な仕方で勞働を續行せしめ、實際にはその商人たちのために勞働していたこれらの機織業者たちの上に、商人として支配だけを行つていたにすぎぬ。この行き方はどこでも、現實的資本制生産方法の妨げとなり、現實的資本制生産様式の妨げとなり現實的資本制生産様式の發展と共にそれは廢滅に歸する。それは生産様式を革命することなくして、直接生産者の地位を惡化するにすぎず、かれらおば資本のもとに直接に從屬せしめられている人々よりもヨリ不良な諸條件の下に立つ單なる賃銀勞働者およびプロレタリアートに轉化し、舊來の生産様式を基礎としてかれらの剰余勞働を占有する。」

「商人が産業經營者になる。というよりは寧ろ手工業的殖に農村的の小産業と彼自身のために經營せしめる。他方にはまた生産者が商人になる。例へば機織親方が商人から羊毛を少量づつ供給され自己の職人たちと共にこれを商人のために加工することをやめて、自ら羊毛なり糸なりを購買して、製造した織物を商人に販賣するという如きである。生産上の諸要素は彼自身の購買した商品として生産行程に入る。而して彼は今や、個々の商人なり又は一定の顧客たちのために生産するのではなく、商業世界のために生産するのである。生産者が彼自身商人になる商人資本はたゞ流通行程だけを行うものとなる。本來、商業はツンフト的並に農村家庭的な産業及封建的農業をば資本制的經營に轉化せしめる前提條件であつた。それは一部的には生産物のために市場を造り出すことにより、一部的にはまた新たなる商品等價を造り出し、新たなる原料及び助成材料と生産に供給することによつて生産物を商品に發展せしめる。かくして市場

及び世界市場を目的とするところの生産といふ點からみてもまた世界市場から來る生産諸條件を以てするといふ點からみても　最初から商業を基礎とせる生産諸部門が開始されることになる。」（「資本論」第三卷上二九三―五頁）

二、この問題は同時に、産業資本の形成過程における商業資本の歴史的役割の問題に關連してゐる。商業資本・高利貸資本は理論的にも歴史的にも資本制生産＝産業資本の不可缺の前提條件であるが、充分な條件ではない。

なぜならば、商業・高利貸資本は舊來の生産樣式をほりくずしはする、しかし、それがどの程度に舊來の生産樣式を解體せしめるかは後者の堅固さと内部的組織のいかんにかゝつているし、その解體の結果としてどんな新らしい生産樣式が出現するかは商業にかゝわつているのでなく、舊來の生産樣式そのものゝ歴史的性質にかゝわつているからだ。たとえば、古代世界においては商業の發達は奴隷制生産をもたらしたし、近代世界においてはそれは資本制生産をもたらした。

しかし、このように、商業資本は資本制生産の形式を促進する歴史的前提條件であることを忘れてはならない。すなわち、商業資本は、貨幣財産を集積し、大規模な市場を組織し、交換價値のための生産という性格を生産諸體制にあたえることによつて、産業資本の前提條件をつくり出す。それゆえ、商業資本も産業資本も、ともに價値を增殖する資本として同型の經濟現象であり、同じ經濟法則に服するのである。つまり、商業資本の「利潤」は單なる「掠奪」や「僞瞞」でなくやはり價値法則を前提として説明されねばならない。それにもかゝはらず、商業資本が産業資本の形成を「阻止」し、「反動的」であるかのやうにみえるのは、商業資本と産業資本との發達は反比例し、從つて、孤立的分散的な小商品生産の段階（小規模な生産とこれに照應する小規模な市場）においては小商品生産＝産業資本に對する商業資本の純經濟的な意味での壓倒的獨占的な支配がふるわれ、そして依然として手工業生産の技術の上に止つているマニュファクチュアの段階においては産業資本は小經營を驅逐することができず、商業資本と密接不離に結合しているからである。このような産業資本の未發達の段階を、賃勞働と資本という對立からでなく「商業資本對産業」という對立の觀點からみれば、商業資本が産業資本の形成を阻止するかのように見えてくるのは當然である。

二つの道の問題は、小商品生産者の孤立的分散的な生産手段の所有が、少數の資本家の所有に轉化され、勞働が資本の下に從屬せしめられることによつて、勞働の社會化と生産手段の集積とがおしすゝめられ、したがつて社會主義のための諸條件がつくられつゝある過程における、商業資本の「進歩」的な役割をこそ問題としている。マニュファクチュアの段階の特徴は、大經營と小經營との並存、兩者が商業資本によつて結びつけられており、産業資本と商業資本とが密接にかつ不可分に結合していることであるが、この資本制生産のマニュファクチュアへの發展を一つの國民經濟・産業部門について歴史的に考察してみると、小商品生産者が産業資本家となる一道と、商人が事實上の産業資本家となる一道とが絡みあつており、その緩急の差はあれ、ともに小數の資本家の下での勞働の社會化と生産手段の集積とをもたらし、大工業のための準備的段階を作り出す。

三、二つの道の問題は、これを國民經濟的統一、大工業のための國内市場の展開という觀點から、より具體的に展開すれば、一國における資本主義の繼起的な發展諸段階の推移のテンポの性質に關する問題であり、同時に一國における資本主義の基本的な社會的生産諸形態の歴史的な特質に關する問題である。これを全體としての國民經濟的統一という觀點から見れば、一國における資本主義の段階の構造の歴史的特質、とくにマニュファクチュア時代ないし廣汎にマニュファクチュアの殘存せしめられている産業部門において産業資本と商業資本との具體的な結合に關する問題である。それゆえ、マニュファクチュア＝産業資本と「問屋制家内工業」＝商業資本とをきりはなして「對立」せしめて

はならない。

さらに、資本家的生産様式の社會的な生産形態に關する問題を、個別資本の經營形態の問題に矮小化してはならない。たゞ、個別資本が社會總資本の一構成部分であり、後者が前者のからみあいから構成されているかぎりにおいて個別資本の經營形態が資本制生産の生産形態の一見本としてあらわれるかぎりにおいて、經營形態は社會的意味をもつのだ。マニュファクチュアは、先行的な段階である小商品生産の直接的な結果である。だから、二つの道の問題は、直接生産である孤立的な分散的な小商品生産者がマニュファクチュア資本家となるか、商業資本家がかれらをマニュファクチュアの構成部分として從屬せしめてゆくとかの問題にほかならぬ。

國内市場論の觀點からこの問題を一段と展開したレーニンによれば、第一の道は、小商品生産者が資本家的單純協業者となり、つぎにそれが分業を採用して資本家的マニュファクチュアとなる。（註一）レーニンは、このマニュファクチュアを、「典型的資本家的マニュファクチュア」または「狹義のマニュファクチュア」とよんでゐる。（註二）

第二の道は、小商品生産者に對する商業資本家の支配の最高發展段階である「資本制家内勞働」を支配するところの、したがつて事實上の産業資本とに轉化した商業資本が、小商品生産者たちを部分勞働者にすることによつて、あるいは、商品別分業をおこなはしめることによつて、全體として手工業生産と分業とを技術的基礎とし、資本家的協業を組織する場合である。この場合、レーニンはかゝる全體としての生産機構を、「家内制大生産」（註三）あるいは「その組織から見れば資本家的マニュファクチュアに近い。」「たとえ小作業場から分出してそれらを支配する大作業場は存在しないとしても、そのかわりに深く根をはつた分業と部分勞働者大衆の資本への完全な從屬」「部分勞働者大衆が、資本へ完全に從屬あしめられた複雜な生産機構」（註四）などとよんだ。これらの二つの道・形態は、たがいにからみあいながら、マニュファクチュア段階における商業資本と産業資本との結合をあざやかに表示しているのである。

なお、右の第二の場合、このやうな商業資本の小商品生産者に對する事實上の賃勞働者としての支配關係を、産業資本の繼起的な發展段階からきりはなして漠然と「問屋制家内工業」とよび、これを小營業やマニュファクチュアと異るところの産業資本の特殊な發展段階・生産形態と見ることは誤りである。産業資本の發達という前向きの見地からまさに資本主義の矛盾の形成と展開が問題となつているとき、分散的な部分勞働者（小營業的農民・親方・職人）に對する商業資本のかゝる支配は、これを全體としてみれば一商人を頂點とする家内制大生産の組織である。ただ、この場合、産業資本は未だ封建制の胎内から形成されたばかりの原始的な狀態にあり、從つて野蠻な中世紀的諸關係によつてからまれ（チープ・レーバーと勞働者の土地經濟への結合）それだけに搾取の眞相がいんぺいされているにすぎない。そしてこのような段階においては、産業資本は商業資本に從屬せしめられてか、精々併存しつゝからみあつているものだ。

（註）

一、レーニン「ロシアにおける資本主義の發達」岩波文庫版、下卷三六―四〇頁、七二頁

二、同七五―六頁

三、レーニン「人民の友とは何ぞや」白揚社版、三七四、三七

四、マニュファクチュアは手工業的生産を技術的基礎とするがゆえに、小經營を完全に驅逐することが出來ず、小經營及び家内勞働者と大經營との並存、その結び目としての商業資本の廣汎な存在こそがマニュファクチュア時代の特質をなしてゐる。それゆえ、商業資本は、マニュファクチュアの段階に特殊な資本と賃勞働との搾取關係・階級關係をイ

五、三八〇、三九六、五五二、五六四、五六六頁

エンゲルス「住宅問題」序文＊スターリン「レーニン主義の諸問題」ナウカ社版、六二―四頁などを參照

四、レーニン「發達」下、九三頁

ンペイしてしまう。だから、商業資本と産業資本との發達における反比例の法則（註一）を正しく把むことは、この搾取關係、階級關係の社會經濟的内容を捉えるために重要なのだ。

小商品生産者はこの場合、もはや決して獨立の生産者ではなく、これらの「工場主」＝産業資本家や「製造家」＝商業資本家の事實上の賃勞働者すなはち「家内勞働者」となつており、資本家的マニュファクチュアの不可缺の「派出所」となつているか、問屋を頂點とする「問屋制家内工業」の一構成部分となつているかである。

なお、この場合、産業資本の社會的發達段階がマニュファクチュアの段階に止まつているのであるから、資本家的マニュファクチュア＝生産は、製造家・問屋　流通を自己に從屬せしめてしまうことは出來ない。それゆえ、この産業資本と「資本制家内勞働」との間にいくつかの商業資本が介在する場合には、これらの商人が材料の分配をする專問的商人として、そのかぎりで生産が流通を從屬せしめつゝある過程にあるとしても、マニュファクチュア時代の全體としては、商業資本は産業資本といわば「肩をならべて」支配しているのだ。だから、マニュファクチュアの「派出所」としての「資本制家内勞働」を媒介する商業「資本」と、自ら「問屋制家内工業」・「分散的マニュファクチュア」の頂點となり「資本制家内勞働」から搾取した剩余價値を全部そのポケットに入れる商業資本とは、一應、區別されねばならぬ。

だからといつて、「マニュファクチュア」資本家なるものは、必ず「大作業場」（狹義のマニュファヤチュア）をもつていなければならぬとはかぎらない。製造家・問屋が、技術的に手工生産にもとずいて部分勞働もしくは製品別分業を組織し、經濟的に全體として資本家的協業をおこなつているならば、これはマニュファクチュアである。かゝるマニュファクチュアが、商人のイニシアチーヴで機械を採用することによつて、そのまゝ、大工業に推移し、商人が大工業資本家となることになつて、商業資本家的支配が産業資本的支配に完全に道をゆずりうることは、すでにマルクスの指摘したところである（例、ロンドンの家具製造業）（註二）。われわれはかつてこのようなマニュファクチュア時代における、商業資本を頂點とする家内勞働者群に對する分業にもとずく協業を、典型的マニュファクチュアと對立せしめて、分散的なマニュファクチュアと呼んだのである。

このように、問屋や大作業場主のために、事實上の部分勞働をいとなみ、從屬せしめられている小經營（親方・職人・下請人・農民）は、ナロードニキにとつて獨立の生産者のように見え、かれらは、このような小經營の沒落は、ツァーリズム權力下の協同組合によつて救濟しうると考へ、ツァールの國家にその救濟を期待した。（註三）ナロードニキは、かゝる全體としての關係において形成され發展せしめられつゝある資本主義的矛盾、勞働の社會化と生産手段の集積とを見ることが出來なかつた。小生産者が商品經濟體制の下に生活し經濟を營んでいるとき、かれらは小ブルジョアであるが、この小ブルジョアのイデオローグであるナロードニキは、市場に對する小生産の關係は小生産者を必然的且つ不可避的にブルジョアジーとプロレタリアートとに分裂せしめることを表象しえないのだ。これに反して、レーニンは、このような小經營は問屋や大作業場を頂點とする家内制大生産の一構成部分であると考え、これを全體として資本家的性質をもつ生産機構としてとらえ、そこに大資本家と分業的に組織された事實上の勞働者との敵對的矛盾を見た。かゝる生産機構は、おくれた技術と勞働者の微細な土地經濟えの結合を特徴とし、資本家的支配のほかに高利貸性や半隷農的小作制度や野蠻な勞働條件の無數の網の目によつてつきまとはれており、したがつて、資本家的搾取をいんぺいするためにもつとも好都合な制度である。そして、勞働者階級の經濟的文化的水準を低下せしめ、政治的組織、結集を孤立分散せしめる點においても資本家にとつてもつとも好都合な制度である。しかしながら

かゝる生産機構はあくまで資本家的性質をもち、したがつて資本主義の矛盾を形成すると共に、その歴史的使命をもつ。すなはち、それは勞働者階級を教育し、訓練し、組織することによつて、資本主義の墓掘人をつくり出す。

（註）
一、「資本論」第三卷、上、邦譯二八六―七頁　　二、同、二九四頁
三、「人民の友」四四七頁

五、マニュファクチュアの段階において廣汎に利用され、資本家的搾取關係、階級關係の存在をいんぺいするところの「資本制家内勞働」にふれておこう。「資本制家内勞働」すなはち、資本家によつて前貸された材料を出來高拂によつて賃加工するといふ搾取形態は、資本主義のすべての發展段階に見うけられるが、とくにそれはマニュファクチュアにとつて特徴的である。その特徴は、第一、資本家と家内勞働者のあいだに極めて多くの仲介人が存在し、かれらが大企業家から卸で買つて小賣で分配すること、第二、現物による支拂がおこなはれていること、第三、非衞生的勞働と不可避にむすびついていること、第四、勞働日が極めて長いこと、第五、婦人、少年、兒童等のチープ・レーバーが用ひられること、第六、直接生産者が土地との聯關を保つているため勞賃が極めて低いこと、第七、家内勞働者が分散していること、第八、家内勞働者の分散と仲介業者の過多とは、高利貸制度とあらゆる形の人身的隷屬とをともなうこと、等である。

つぎに家内勞働普及の諸條件は、第一、農民の土地への緊縛、第二、農民層の分解、すなはち、一、自己の勞働力を賣らなければならない。しかも安く賣らなければならない大衆的な農村プロレタリアートの存在、二、勞働を分配するにあたつて問屋の代理人の役割を演ずるに充分なほど地方的市場圏によく通じている富農の存在（なお、經營主や買占業者や問屋が同時に富農であることが多い）第三、資本主義によつて造出される相對的過剰人口の存在。一言にしていへば、廣汎な「チープ・レーバー」の存在である。（註一）

なお、マルクスはマニュファクチュアの生産物の本質が、一工程連續的であるか組立式であるかによつて、マニュファクチュアを有機的マニュファクチュア（例へばピン・マニュファクチュア）と混成的マニュファクチュア（例へば時計マニュファクチュア）に分けた。

右にのべた混成的マニュファクチュアの場合には、家内制大生産もしくは分裂的マニュファクチュアが組織されやすい。第一に、その工程が組立式であるという特質によつて、第二に主としてチープ・レーバーであることによつて。（註二）。

（註）
一、「發達」下、一四八―一五四頁　　二、同九〇頁

六、以上、二つの道は、そのいづれの經路がたどられるにせよ、産業資本主義は發達するという前向きの問題として提起されている。それゆえ、問題はいずれにしても資本主義の、從つて、資本と賃勞働との基本的矛盾の展開が「革命的の急速か、改良的に漸次的か」というふうに提出されている。であるから中世紀的諸關係の殘存や商業資本の網の目が資本家的搾取、勞働の社會化、生産手段の集中を、おゝいかくしているマニュファクチュアの時代において、産業資本と商業資本との密接な結合をこそ分析すべき時に、兩者をきりはなして對立せしめ、産業資本は「進歩的」（「資本主義の歴史的使命」）だが商業資本は「阻止的」であると考えつゝ、二つの道の問題をとらえ、これを「資本主義の發達かそれとも資本主義の阻止か」というふうに提起してはいけないし、なおさら「封建的生産様式か資本家的生産様式か」というふうに提出してはならない。

七、レーニンはマルクスの二つの道の理論を、國民經濟＝國内市論場の觀點からヨリ具體化し、これをマニュファクチュアの發生過程の相異る種類としてつかまえた。しかし、これは、レーニンによつてブルジョア民主々義革命の途上における農民問題という見地から定式化されかつ具體化された、農業資本主義發達の客觀的な可能な道としての二つの經路、農業危機を克服するための二つの型に關する理論（註一）から區別されねばならぬ。それゆえ、兩者をたゞちに同視するのは誤である。（註二）

第一、農業生産力のブルジョア的進化にかんする二つの道の問題は、農民經營のブルジョア化を先頭とする革命的にして急速なかつ自由なアメリカ的發展と、地主のユンケル經營を先頭とする、改良的にして緩慢なかつ直接生産者にとつて苦難にみちたプロシヤ的な發展との間の斗爭として、したがつてまた、農業危機の克服をめぐる農民的農業、革命＝土地革命と地主的土地改革との、二つの型の間の敵對的な階級斗爭として提起されている。封建制は農業生産を土臺としており、農業の主要な生産手段である土地、農業における資本制生産の自主的發達にともなう地主と全農民との間の、二つの道＝型の斗爭は、直接的に權力のうちにその政治的對應關係を見出す（生産様式―階級關係―國家權力）。たとえば、それはロシアのブルジョア民主々義革命においては、封建的身分的大土地所有關係をその物質的基礎とするツァーリズム權力をめぐつての、農民＝農業企業家の中央集權的ブルジョア共和國と地主＝ユンケルの中央集權的立憲君主國との斗爭として表現された。だから、土地革命と土地改革とは、それぞれこれに對應する新しい權力の下にのみ遂行される。そして、社會主義革命によつてのみ解放されうる勞働者階級が、アメリカ的な經路、農民的農業革命の型を支持し、それのために農民を啓蒙するのは、この過程において勞働者、農民の同盟を確保すると共に、プルジョア共和國の實現が社會主義への不可缺の經過點だからであつた。

しかし、工業における資本制生産様式＝マニュファクチュアの形成にかんする三つの道は、國家權力との直接的對應關係をもつていない。それは、商業資本がたとへ舊生産様式を解體せしめることができても、それ自體では新生産様式をつくりだすものでなく、また、舊生産様式にとつてかわつてどんな新生産様式が出現するかは與えられた歴史の發達段階にかかわつているからだ。たとえば、近代世界においては商業の作用と商業資本の發達とは資本制生産に結果したが、それは商業資本＝流通そのものの性質にかかわることでなく、封建的農業や手工業の生産様式の孤立的分散的な小商品生産の解體の結果にほかならぬからだ。

第二、しかし、農業においても工業においても二つの道の理論は、ともに資本主義發達のテンポにおける革命的な急速な經路と、改良的な緩慢な經路を指摘している點で同一である。

（註）

一、農業資本主義發達の二つの道については、とくに＊レーニンの「ロシア農業問題」改造社版。八七七頁、註一〇六を參照。

二、＊守屋典郎「資本主義論爭の系譜」大學創刊號、六四頁における筆者への批評には、かゝる誤解が前提となつている、のこと

八、マニュファクチュアの經濟構造は、産業資本と商業資本との密接かつ不可分の結合を特徴としている。この社會的生産形態は、大作業場＝産業資本を頂點とするマニュフュクチュアと問屋＝商業資本を頂點とするマニュファクチュアとの結合からなつている。ところで、産業資本と商業資本との發達は反比例するという法則にしたがい、一般的にいえば、産業資本が機械および大工業の段階に發展すれば商業資本（問屋を頂點とする「問屋制家内工業」は消滅せざるをえない。さて、絶對主義權力が農奴制の遺物、その權化としての封建的大土地所有を維持し、農業における資本主義の不可避な發展に直面して、プロシヤ的經路を支持し補充することによつて、アメリカ的經路を壓迫し買收する

ような場合、農民層の分解もまた緩慢にそして未熟にならしめられざるをえない。このように、封建的大土地所有にもとずく半隷農的小作制が經濟制度として國民經濟の中にくみいれられ、それが權力にたすけられつゝ農民的小商品生産を壓迫している國民經濟および産業部門においては、そしてその上に獨占資本主義が重壓を加えていればもちろん、資本主義的生産様式の自生的發達は小營業及びマニュファクチュアの發達段階・生産形態に緊縛され、停滯せしめられる。

このようなマニュファクチュア形態の廣汎な殘存は、商業資本の事實上の産業資本への轉化の經路と形態とを存續せしめる。この道は、新しい生産様式をつくり出さないで、つねに野蠻な高利貸制と劣悪な勞働諸條件とを滿身にまとうている。しかも、この場合、一國における資本主義の全體の發展段階に應じ、マニュファクチュアは大工業資本、さらには獨占資本に從屬せしめられている。

レーニンは、農業におけるプロシヤ的發達の道と、工業における商人的發達の道との、十九世紀末ロシアにおける絡みあいについていう——

「雇役制度と資本家制度との結合は、地主經濟の今日の構造を、機械的大工業の出現前に我國の繊維工業を支配していたところのあの構造に、經營的組織よりみて、極度に類似したものたらしめている。彼處（繊維工業）では、作業の一部分を商人は自己の道具と賃勞働者とによつて遂行した（紡糸の經糸作り、着色および織物の仕上げ等）が、一部分は、彼のために彼の材料で働いたところの農民＝クスターリの道具によつて遂行した、こゝでは作業の一部分は地主の農具家蓆類を使用しつゝあるところの賃勞働者によつて執行され、他の部分は——他人の土地で勞働しつゝあるところの農民の勞働と農具家蓆類によつて執行されている。かしこでは商業資本は産業資本と結合しており、而してクスターリの上には資本のほかに、カバラー、仲買業、實物勞銀制度等々がのしかかつていた。此處でも全く同様に、商業資本および高利貸資本は生産者の賃銀の低下と人身的從屬の强化とのあらゆる種類の形態をともなつて、生産資本と結合している。彼處では牛の原始的技術を基礎とするところの過渡的制度が數世紀にわたつて保存され、そして、約三十年間に機械的大工業によつて破壞された。此處では雇役は、陳腐な技術を不朽に傳へつつ、殆どロシアの始め以來存續し（地主達はすでにルッスカヤ・プラーヴダの時代に農奴を隷屬せしめた）。而して改革後の時代になつて漸く、資本主義に急速に地位を讓りはじめつつある。かしこにおいても此處においても、舊來の制度は生産の諸形態（從つてまた、あらゆる社會的關係）における停滯とアジア的狀態の支配とを意味するにすぎない。かしこにおいても、ここにおいても、經濟のあたらしい資本家的形態は、それに固有なあらゆる矛盾にもかかわらず、一大進歩である。」（「發達」上、二五六—二七頁）

九、資本主義的國民經濟においても個々の生産部門におけるマニュファクチュアの段階・形態においては、その部門の歴史的條件のいかんにより商業資本の事實上の賃勞働支配と産業資本の支配とは結合している（例へば、ロンドンの家具商の場合のように）、しかし、産業資本の不可避的な發展、したがつてマニュファクチュアから大工業の段階への展開は、このような商業資本の支配を消滅せしめる。商業資本は産業資本へ從屬し、單なるそのエージェントとなる。それゆえ、大工業の段階における産業資本の「外業部」としての「資本制家内勞働」と、マニュファクチュア段階における問屋資本の一構成部分としての「資本制家内勞働」とは區別されねばならない。なぜならば、たとへ大工業資本とその「外業部」との間にいくつかの商業資本（「ブローカー」「下請業者」「製造業」など）が企在するとしても、もはやこれらの商業資本は、マニュファクチュアの段階において産業資本といわば對等に結合しているのでなく、大工業段階における産業資本の一代理店にすぎず、その剩余價値の一部を平均利潤のための競爭への參畫を通じて攫取するにすぎないからだ。大工業の段階においては生産は流通を屈服せしめるからだ。

しかも、獨占資本の段階においては、産業資本すらも、金融資本に融合支配されてしまう。わが國のように、半封

建的大工地所有の殘存が農業における產業資本の發達、したがつて農業らの加工業の分離を阻止し、緩慢ならしめている場合には、小營業やマニュファクチュアが廣汎に存續せしめられている。それゆえ、小營業にたいする商業資本の支配の種々の形態や、產業資本と商業資本との密接な結合がほとんど加工精製業の全域にわたつてくりひろげられている。しかも、それがマニュファクチュアや大工業の段階・形態にある產業資本の「外業部」としての「資本制家內勞働」と相互にもつれあい、全體としてそれぞれの產業諸部門における獨占資本の支配の網の目にくりこまれている。一見獨立しているように見えるところの、孤立的な分散的な小商品生產者・「家內勞働者」、街工場などは、大小の產業資本・商業資本の媒介を通じて、獨占資本のために收奪され、壓迫されているのである。

（二）

資本主義の基本的矛盾に對する「大塚」史學の理解は、歷史の發展にたいするその態度と、緊密な內面的關連をもつている。「大塚」史學は資本制生產における生產の社會的性質と生產の結果の資本家的所有との矛盾、勞働者階級と資本家階級との敵對的對立のかわりに、ウェーバー・マントウ・アンウィンなどと共に資本制生產＝產業資本と流通＝商業資本との「對立」をおく。それゆえ、「大塚」史學は歷史の運動法則を歷史的生產に內在する對立物の斗爭として、內在的原動力にもとずく自己運動としてつかまえることができずに、生產にとつて外部的な前期的資本＝流通の中に、あるいは「精神」の中にその原動力を求めてゆく。

ここでは、マルクス經濟學の觀點から資本制生產＝產業資本の發展に對してもつ經濟的地位（進步と限界）を確定し、「大塚」史學の「前期的商業資本」論に對して簡單な論評を加えておく。氏の二つの道の理論に對する誤りを明らかにするといふ目的の範圍內において。

（一）さて「大塚」史學の最近における、「前期的」資本論をうかがおう。まず、氏はいう——

（一）『資本』によるものを極めて抽象的形式的に解して『自己增殖する價値』或いは一層平たく『營利』Gelderwerb などと規定したとするならば『資本』の存在は……人類の歷史と共に古い。

「『資本』なるものは決して近代的資本主義的な性格のものばかりでなく、或いは『封建的』なる資本『奴隸制的』なる資本『アジア的』なる資本も亦見出される」「卽ち、世界史における社會の經濟構造の各發達段階はそれぞれ自己の特殊歷史的な性格に相應する所の『資本』をもつ」。

マックス・ウエーバーは「中世封建社會においてもまた資本の作用が極めて明らかに『封建的』なるものの形成と維持を指向していた點を繰返し持摘している。とりわけ中世封建社會、就中イギリス封建制の場合には、コスミンスキー及びポスタンの最近における研究が『資本』の存在と活動が封建的土地所有の進展をば力强く推し進め且つ封建的土地所有の崩壞に際してはそうした『資本』も亦これと運命を共にしつつ沒落の途を辿つてゐるという史實を興味深く敎へている。』

（二）「それぞれの發展段階の持つ『資本』の歷史的性格をできるだけ正確に把握」するには、「第一は歷史的史實的にそれぞれの『資本』の歷史的性格を大極みに把握してゆくことである。」「第二は社會學的理論的に各發達段階における『資本』の運動法則をば一般に規定することである。實はこうした觀點からするならば凡そ『資本』とよばれうるものは、一方における近代・資本主義的な資本と、他方における『封建的』・『奴隸制的』・『アジア的』のすべてを含めての『前期的資本』に二大別される。」

「こうした『近代的』な資本と對比せしめられる所のあの『前期的資本』の運動法則をば、社會學的理論的に十分に究明しておかればならぬ」「かように性格の『前期的資本』の存在が確認され且つその法則性が理論的に究明されている場合、……近代「以前」の經濟史と所謂「後進」諸國の社會的經濟構造の正確な構造的理解が可能となるであろう。」（以上同氏「資本の封建性と近代性」帝大新聞一九四六・七・九號）

右において、氏は、第一に「前期的」資本は前資本制社會の世界史における社會經濟構成の繼起的な發達段階に存在し「社會學的理論に」「各發達段階における『資本』の運動法則をば一般的に規定する」といふ觀點に立つと、資本

は「前期的」資本（商業資本および高利貸資本）と「近代的」資本（産業資本）とに「大別されること、第二に「前期的」資本は「近代的」資本とは別個の「運動法則」をもつこと」をのべている。つまり、ここでもつとも重要なのは、氏が「社會學的理論的」に「前期的」資本の「運動法則」を「一般的に規定」しうる、とのべている點だ、つまり、氏は「廣義の經濟學」的見地と「狹義の經濟學」的見地とを混同し、前者を後者からきりはなして、對立させてしまう。

換言すれば、「前期的資本」（商業資本・高利貸資本）は、産業資本＝資本制生産以前のあらゆる階級社會に存在するから、これらの前資本制的社會經濟構成にわたつて妥當する法則をもつというのだ。

しかし、いうまでもなく、歴史の發展法則は一定の特殊の構成體に固有なものである。その法則は當該社會構成體の下部構成としての生産樣式（生産力と生産關係との統一）に内在する基本的矛盾を原動力として自已運動するところの法則である。前資本制生産樣式の法則は、從前の規模における、從前の基礎上における生産過程の反覆であり、地主の賊役經濟、農民の自然經濟、加工業者の手工業的生産はそうであつた。これに反して、資本制生産の法則は、生産樣式の不斷の革新と生産規模の無制限的擴大である。そして、商品資本制生産＝産業資本に固有の運動法則は價値＝生産價格法則であり、かつ、産業資本と商業資本とは全く同型の經濟的現象である。

三、さらに、立ちいつて、氏のいわゆる「前期的」資本の「一般的」な運動法則をきこう。氏はいう——

「前期的」資本の運動法則は、左のすべての點で産業資本のそれと對立する。

第一、「近代的なそれと異つて、資本の生産過程を有つて居らない。」

「前期的資本が生産過程を有たずして利潤を獲得するとすれば、それがひとまづ流通過程からである事は瞭らかであらう。而して流通過程から利潤が獲得されるとすれば、等價交換ならぬ等價交換、即ち價値以下に買つて價値以上に賣るといふプロセス以外では不可能である事も瞭かであらう。前期的資本が存在し且つ自已增殖の活動を行うのは、まさしく、こうした非等價交換の地盤の上に於てなのである。」「近代以前の發展諸段階における生産力の低さ、その直接の結果としての交換物資の量の少さと交通關係の未發達、更に又こうした生産力の低さに相應する社會諸關係から歸結する所の商品流通に對する諸種の妨害——山賊・海賊をはじめ關所・道路强制等に至るまでの——の結果として地域的にも時間的にも價格は極めて偶然的に決定され、一市場一價値法則は到底實現しうる可能性なく、その結果として絶えず非等價の交換が行われる。」「即ち價値法則（等價交換への必然性）が、生産力の低位とそれに相應ずる經濟的な諸制約の故に、自已を實現せんとして而もその實現を妨げられているといふ勝れて假定的な狀態、こうしたものこそ前期的資本が利潤を獲得するために不可缺な前提條件であつて、こうした地盤の上にそれは、價値以下に買つて價値以上に賣るといふ非等價交換によつて、流通過程から利潤を抽出する。」かゝる意味での前期的資本の活動は「經濟的ではなくむしろ經濟外的强制なる歴史的性格をはらんでいる」。

第二、「前期的資本は、或いはアジア的な或いは奴隷制的な或いは封建的な、ともかく近代以前的な生産過程において作出されるところの餘剩生産物をば、非等價交換の流通機構を通じて貨幣形態で獲得するのである。」「前期的資本は自已特有の生産過程を有つのではなく、むしろ近代以前の——アジア的であれ奴隷制的であれ封建的であれ——生産諸樣式の上に寄生し、そうした生産過程において作出されたところの餘剩生産物をばだゞ分け取るに過ぎない。要するに前期的資本は本來寄生的な存在なのであり、從つて、その利害は窮極的には自已の活動の基盤たる在來の生産諸事情のそれにつねに一致せしめられているのであつて前期的資本の所謂無性格性や保守性反動性等の諸性格もこゝから當然に歸結してくるのである。念のためにいつておくがかような寄生的無性格的資本がいかに發達しようともそこから近代的な産業資本やその基盤たる近代的生産樣式が生まれて來るものではない」。

第三、「前期的資本の代表的な形態は商業資本及び高利貸資本」であり、「その活動の中心はむしろ流通過程の裡にあり、非等價交換の可能性を利して省略や僞瞞、時には强力によつて廉く高く賣ること——あの掛値と値切りの掛け引きや腹藝や押賣り、——こそが本領なのである」「前期的資本の利潤は、近代のそれと異つて、本來的に商品の裡に胎れているものではなく、むしろ省略及び僞瞞によつて外側から獲られるものであつて、しかもその成否は全く偶然的な事情によつて決定される」したがつて、

「前期的資本家は絶えず貨幣を流通過程の外に引き出し、貨幣財産として推積しようとする。

第四、だが「前期的資本は右のような活動の結果としてともかくも商品流通の範圍および密度を擴充することとなる」「特に社會的生産力の擴充によつて……それが裏付けられた場合、この傾向は決定的に推進され、而してその當然の結果として價法則は自己を貫徹し、等價交換が一般化するようになる。……そこで、實態がここに到ると、前期的資本はその保守性を露はにして反動的に舊來の事情、就中、生産事情を維持しようと努める」「その方法はある近世初期のヨーロッパに特徴的にあらはれた『獨占』であり、更にかの問屋制度も亦こうした獨占の一つの特殊形態にほかならない。

第五、「こうした前期的資本の發達の中からは近代の産業資本やその基礎たる近代的生産樣式は決して出て來ない」「歴史上前期的資本が産業資本に轉化する事例は充分に見出され得る。しかしそれは産業資本形成の自主的な途でも自律的な轉化でもなく且つ、こうした系統の産業資本は前期的資本の性格を決して捨て去ることなくして、舊來の近代以前的な社會的生産的諸事情と豪末も矛盾することなきまゝ充分にそれと共生しうるものであるという事實を忌れてはならない。（以上、同氏「前期的資本の歴史的性樣」帝大新聞一九四六・八・一三號）

三、以上の所論を整理すればこうだ。第一、産業資本と「前期的」資本（商業資本・高貸資本）は同型の經濟的現象ではない、というのは前者は經濟的性格をもつが後者は「經濟外的强制という歴史的性格」をもつからである。それゆえ「前期的」資本の「利潤」は商品交換の「一般的法則である價値法則にもとずいて抽出されるのでなく、商略・欺瞞・强力によつて抽出される。第二、産業資本と商業資本との相異は、前者が生産過程をもつのにたいして、後者がこれをもつていないことにある。第三、「前期的」資本は與えられた生産樣式に寄生するばかりで、それ自身では新生しい生産樣式を決してつくり出さない。それゆえ、それは「保守性」・「反動性」をもつ、たしかに「前期的」資本は商品流通の範圍・密度を擴大することによつて資本制生産の不可缺の前提條件となるが、産業資本が形成されてくるとこの「保守性」・「反動性」はますます露骨となり、ついには「獨占資本」となり「問屋制資本」といふ形態で舊來の生産事情を維持しようとつとめる。第四、なるほど、歴史上「前期的」資本が産業資本に轉化する事例は充分に見出されるが、こうした「系統」の産業資本は決して「前期的」資本の性格――「經濟外强制」という歴史的性格」――をすてるものでない。

さて、右のような「大塚」史學の見解は正しいか？　否、それは正しくない。

批判

四、第一、「大塚」史學は、「前期的」資本（商業資本・高利貸資本）も産業資本と共に、利潤を得て賣るための商品の購入という一般的公式に包括される同型の經濟現象であることを理解しない。だから、商業利潤を單なる「商略」や「欺瞞」の「經濟外的强制」によつて説明し、その經濟的本質をみようとしない。商業資本は、大量的販賣の價値と小販賣の價値との差額から利潤を引き出すのであるから、あくまで生産物の買入と販賣とは商品交換の一般的法則によつて行われるということを前提として利潤の形成を説明せねばならぬ。小商品生産者にたいする商業資本の支配はこのような經濟的原因――分散的な小販賣にたいする大量的な大販賣の純經濟的優越性――にもとずいていうち立てられるのだ。「この經濟的原因のみが商業資本が實際において取りかつ極めてありふれた詐欺も不斷にそのなかにおいて見受けられる（このことはなんら疑う余地がない）ところの、種々雜多の形態を理解するための鍵を與えうるのである。これと反對の態度をとること――通常ナロードニキがするやうに――、すなはち『クラトク』の瞞着を指摘するに止まり且つこれを基礎にしてこの現象の經濟的性質の問題を全く無視することは、俗流經濟學の見地に止まることを意味する。」（「發達」下卷、四三頁、なお「資本論」第一卷、（上、）一三五頁、三七頁の註三七、同三卷上、二八八―九頁、二九五頁參照）。

第二、經濟學上、商業資本と産業資本との區別は次の點にある。即ち前者は「同一」の商品を利潤を得て販賣するため

に商品を買入れるに對し、後者は商品を加工されたい形で販賣するために商品を買入れること、したがつて原料その他および原料を加工せしめる勞働力を買入れることにある。「大塚」史學のいわゆる前者は生産過程をもつが、後者はこれをもたぬといふ點はこれだ。それだからといつて、生産上の搾取が「前期的資本」の搾取の「後ろめたさ」（大塚氏のことば）によつて、いんぺいされ合理化されてはないない。

最後に、氏の第三、四の見解に對する批判をもふくめて、産業資本の發達という前向きの觀點からとらえた、商業資本にかんするマルクスの基本的命題を「大塚」史學の商業資本論に對置しよう。

五、商業資本は理論的にも歴史的にも資本の最初のもつとも自由な存在形態である。一般的には資本の、特殊的には商業資本の存在條件は、商品＝貨幣流通の存在である。つまり、あらゆる資本の出發點は、一定量の貨幣の集稱であり、個々人の掌中における自由な資金（個人的消費にふりむける必要のない資金）の形式である。商業資本の出現の條件は、第一に小生産の分散性・孤立性、かれらの間における經濟的不和と斗爭との存在、第二に、小規模的な分散的な生産に照應する小販賣と擴大する市場との矛盾がこれである。その場合、商業資本はこれらの小商品生産のうちから分出されるのであるが、小商品生産にたいする商業資本の支配は純經濟的法則にもとずく。商業資本は、貨幣財産の集稱をもたらし、商品生産のために大規模な市場を組織し、商品生産を普及することによつて、資本制生産＝産業資本のための歴史的前提をつくる。

商業資本および高利貸資本の役割にかんする、マルクスの經濟學の基本的命題はつぎの點にある。

第一、商業資本および高利貸資本と産業資本（生産に投ぜられた資本であつて、農業たること工業たることを問はぬ）とはともに、利潤を得て賣るための商品の購入という一般的公式に包括される同型の經濟現象である。

第二、商業資本および高利貸資本は歴史的には産業資本の成立に先行し、論理的には産業資本の成立のための不可缺な條件であるが、それ自體としては商業・高利貸資本は産業資本の成立のための充分な條件ではない。それは舊來の生産樣式をほりくずすが、これにかへるに新しい資本家的生産樣式をもつてするものではなく、後者の成立に歴史の發展段階と考へられた諸事情に依存する。

第三、商業資本の獨立的發展は資本家的生産の發展の程度に逆比例する、すなわち、商業資本および高利貸資本の發展が強ければ強いほど、産業資本（＝資本家的生産）の發展はますます弱い、そしてその逆はまた逆である。

大塚氏によつてしばしば引用されるところの「商人資本にかんする歴史的事項」の章において（「資本論」第三卷第四篇第二十章）右の理論的命題とくに「逆比例」の法則を、ヨーロッパにおける資本制生産の繼起的段階的發達という世界史的觀點から實證している。

即ち第一に世界史的に資本制生産がまだマニュファクチュアにも達しない極めて低い段階において商業資本が獨占的に發展し、この法則が「歴史的もつとも著しく現われている」事例として、この段階におけるヴェニス人、ジェネバ人、およびオランダ人の「仲立ち商業」が、經濟的に未發達な諸共同仲間の生産物を媒介し、生産國の兩方から搾取することによつて主要な利潤をあげたが、これらの被搜取民族の經濟的發達が進むに比例して、商業の獨占、商業それ自身の存在・商業諸民族の優越・商業的富一般が滅亡したことをあげてある。（*同、二八七頁）

第二に、マルクスは「逆比例」の法則を、資本制生産の世界史的なマニュファクチュア段階との關連において考察するか。これによれば十五世紀中葉の地理上の諸發見以來の商業資本の急速な發展、商業上の大革命、世界市場の突如たる擴大や流通諸商品の倍增やアジアの諸産物およびアメリカの資源を掌握しようとするヨーロッパ諸國民間の競爭熱や植民制度などが生産の封建的諸制限の破碎に本質的な貢獻を行い、世界史の封建的生産樣式から資本制生産樣式への轉化を促進する二つの主要な要素であるのはたしかだ。とはいえ、前進の理由により「近代的生産樣式はその第一

の期間たるマニュファクチュア時代において、中世紀の間にその條件がすでに造り出されてあつた所にのみ發達した。」たとへばポルトガルに比して、オランダに近代的生産様式が形成されたのは、漁業や製造業や農業に基礎をおいているのである（＊同、二九〇―二九一頁。）

第三にマルクスは資本の大工業の段階において、商業資本はけじめて産業資本に從屬することをのべている。かれによれば、十六世紀中一部的には十七世紀に及んでも、商業の突發的擴大と一つの新世界市場の創生とは、舊生産様式の滅亡と資本制生産様式の興隆とにたいして壓倒的な影響を及ぼしたが、これはすでに形成された生産様式＝マニュファクチュアの基礎の上に行われたものだ。（こゝでマルクスは、すでにマニュファクチュア時代においては、商業資本が主導する市場と、産業資本が主導する市場とのからみあいを指摘し、資本制生産の發達にともない、前者が後者によつて壓倒されてゆき、ついに大工業の段階において商業資本が産業資本が單なるエージェントとなり、流通が生産の單なる一段階として含まれている點を、世界史的に實證している。）というのは、不斷の擴大再生産という資本制生産の内在的法則は、世界市場の不斷の擴張を刺戟し、商業が産業を革命するのでなく、産業の支配は、逆に大工業の諸條件に左右されるようになる。イギリスがオランダに優越したのは、そこにおける封建的土地所有の徹底的な解體が資本制生産様式を急速に發展せしめたからだ。また、支配的な商業國民たるオランダの滅亡史は、同時に世界史的に商業資本が産業資本の下に從屬するに至つた歴史である（＊同、二九二頁）。「マニュファクチュアさらに著しくは大工業が、ある程度まで强固となるや否や、それがまた市場をつくりだし、その商品をもつて市場を征服する。商業はいまや産業的生産の召使となる」（＊同、二九四頁）。

マルクスは、このように「逆比例」の法則を純經濟的現象として説明したのであるから、そこには「前期的資本」の「經濟外的强制」とか、「反動」などという「社會學的」理論はない。

六、さらにレーニンはロシアの國民經濟的統一、大工業のための國内市場の形成過程という規點から、アジアにおける資本制生産の繼起的發展段階との關連において、右の諸命題をヨリ一層具體化した。

第一に、かれはロシアの農民層の財産上の分化、および階級分化の資料について分析し、小營業的農民が絶えず商業資本を分出せしめていることを實證した。

そしてロシアにおいては商業・高利貸資本は産業資本と結合しているか、それは舊來の生産様式をほりくずしつゝその代りに資本家的生産様式もしくは何か他のものを招來しているかという角度から、マルクスの基本的命題をロシアに適用した。そして、第一に農民が生産を擴張するために勞働力を購買しよう（産業資本）と土地・雜貨・大麻・乾草・家畜（商業資本）もしくは貨幣（高利貸資本）を取引しようと、かれらはそれ自身同一の經濟的類型を示し、その業務はその根本において同一の經濟關係に歸着することを實證した。第二、ロシアの土地共同體農村においては富農の手における資本は單にカバライと高利貸業として機能するに止まらず生産へも投下されていること、を示した。換言すれば、資本はロシアにおいて單に商業・高利貸資本としてのみ機能し、したがつて全農民は單に「窮迫」せしめられた齊一的な類型（例へば、「窮迫」せしめられた「半農收的零細耕作農民」一般）として現われ、商人・高利貸は全農民の間において貨幣的財産の大さによつて區別されるにすぎないものではなく、富農は資本を同時に産業資本として投下しており、したがつて全農民層は單に分化しているのでなく階級的に分解しており、その生産の大さや組織からいつても他の農民から區別されていることを實證した。

第三に、かれはロシアにおける商業・高利貸資本の獨立的發展は、農民層の分解を阻止することを命題をたて、そして商業が農村を都市に接近せしめ、村の小賣商の獨立的地位を爆破しつつ、高利貸を發展すればする程驅逐しつつ規則正しい信用形態が發展すればする程、農民層の分解がいよいよ廣くかつ深く進む。富農の資本は小取引・高利貸業から放出せられてますます大規模に生産へ投下せられることを實證した。

しかも、レーニンはマルクスのこれらの基本的命題をロシアに適用し具體化するにあたつて、つねにナロードニキ

の偏見とたたかつた。

クスターリ＝小商品生産者の狹隘な觀點にとらわれていたナロードニキは、第一に「クラーク」（商業高利貸資本）の「僞瞞」を指摘するだけに止まり、クスターリに對する商業資本の支配の經濟的性質、すなわち、商人が生産物の賣買を商品交換の一般的法則にもとずいて行うと假定しても、大量的販賣の價値と小販賣の價値との差額によつてかれらの利潤を獲得するということを見失つている。

かれらは、大市場生産の下においては分散的な小販賣は絶體的に不可能であること、小生産者たちの分散性とかれらの完全な分解（かれらはつねに産業資本および商業資本を生み出している）との下においては、大販賣は大資本によつてのみ組織されうるのであり、そしてこの大資本はこれによつてクスターリを完全な無援と隷屬とに陷れることをみることができずに、組合によつて販賣を組織化することによつて「クスターリ」を援助しうるという理論をたてた。ナロードニキのかゝる理論は、商品生産と資本家的販賣との間の純經濟的な不可分の關連を理解しえぬことにもとずく。

第二、ナロードニキは「クラーク」＝商業・高利貸資本の「クスターリ」＝農民にたいする「僞瞞」のみを泣訴するに止り、「クスターリ」が産業資本家と商業資本家とを分離し、したがつて單なる流通關係における財産上の分化のみでなく、生産關係における階級上の分解をも遂げつつあることを研究しようともしなかつた。それゆえ、かれらは「クラーク」＝商業・高利貸資本と「經營上手な百姓」＝産業資本とは、同一の經濟現象の二つの形態でなく、相互にきりはなされた對抗的な型の現象であるとのべた。それゆえ、マニュファクチュアの段階の特徴である商業資本と産業資本との結合、「分化」と「分解」との關連をみることができなかつた。それは、正に關連をみるべき時に、「對立」をみることによつて、一方では大經營と小經營との間の、他方では商業資本と産業資本との間の聯關をいんぺいしてしまつた。

（三）

「大塚」史學は、氏自らも指摘するように、マルクスの二つの道の理論を「古典的な規定」（註1）とよび、これにたいして、「一國における資本主義の發達を具體的につかむための方法論的意義をあたえている。それは、「大塚」史學の全體系を貫くところの、基幹的な方法となつている。それゆえ、以上の觀點から「二つの道」の理論にたいする「大塚」史學の理論的把握、歴史的具體化が正しいか否か、徹底的か否かは、この史學の全體系にかゝわる問題なのである。

一、氏は封建制生産様式から資本制生産様式への轉化を「前期的」資本から産業資本への轉化というふうに捉えつつ、いう——

「前期的資本は『生産への喰込み』『生産過程の征服』によつて初期的産業資本へ轉化する。即ち、その循環の中に『資本の生産過程』を含むことによつて、あるいは『本來の「産業」資本の循環形態』をあます所なく含むことによつて、範疇的推轉をとげるのである。しからばこれはいかなる形態の下において行われるのであるが。大づかみにしてわれわれはそれを二大別、即ち問屋制家内工業とマニュファクチュアとに二大別しうる」（*同氏、「資本主義の系譜」三四頁）。

右に引用した所で大塚氏は、封建的生産様式から資本制生産様式への轉化の二重の歴史的經路、マニュファクチュア發生の二重の歴史的經路にかんするマルクス・レーニンの「古典的」理論（大塚氏）を、なによりもまず、「前期的資本の産業資本への轉化」の二重の經路にすりかえてしまう。マルクス・レーニンにあつては封建制生産と資本制生産との、歴史的に全く相異る發展法則をもつ二つの纏起的な生産體制の間に劃期的な「轉化」が行われる。それゆえ、こ

の「轉化」の問題は、一般的には、生産様式・階級關係・國家權力をふくむ全社會構成體の「社會革命」が急速に行われるか緩慢に行われるかの問題であり、特殊的には、封建制の胎内において自生的に形成される資本制生産様式が急速に革命的な形態で行われるか緩慢に改良的な形態で行われるかの問題である。この「轉化」は一方では歴史的發展における生産關係の飛躍であり、他方では生産力の中に内面的な繼起的な關連をもつている。この轉化・發展の原動力は生産の内部にひそむ矛盾である。

ところが、大塚氏にあつては、「轉化」は「前期的」資本（流通）と産業資本（生産）との間に行われる。氏によれば「前期的」資本は自らの「經濟外强制的」發展法則をもつのであるから、「前期的」資本がこれと全く別個な「經濟的」發展法則に支配される産業資本へ「轉化する必然性」をもつのだ。「前期的」資本とか「アンシャン・レジーム」とかは、氏によつて特別の「社會構成體」であるかのように表象されているが、それは敎述するやうに、資本主義が古い手工業的技術を基礎として立つており、したがつて無數の中世紀的諸關係によつてからまれている原始的段階（氏が十年前にいわゆる「初期資本主義」を意味するのだ。しかし、流通＝「前期的」資本と生産＝産業資本との間には、繼起的な關聯性は存在しない。兩者はそれぞれ別個の發展法則をもつものではない。流通の運動を規定し、性格づけるものは、生産體制の基本矛盾であり運動法則にほかならぬ。そして、流通はむしろこの矛盾をいんぺいしてしまう。

二、氏は、個別的資本の見地にとらわれるがゆえに産業資本＝資本制生産すなわち全資本家階級による全勞働者階級にたいする搾取關係といふ世界史的な全機構的な觀點から、産業資本を捉えることができず、これを個別貸本の營利のための「經營形態」に矮小化する。そして、小商品生産者ないしマニュファクチュア資本家すなわち氏のいわゆる「生産的生産者」の見地にとらわれるがゆえに、産業資本を賃勞働ではなく商業資本に「對立」させてしまう。そこでは、「マニュファクチュア」や「問屋制家内工業」は、資本制生産の逐次的な發展段階・社會的生産形態ではなく、個々の資本家が「營利」を追究するための手段であり、「經營形態」にほかならぬ。すなわち、氏はいう——

「範疇的推轉」は「問屋制家内工業」と「マニュファクチュア」とに二大別される。「問屋制家内工業」の形態で「推轉」が行われる場合には、「前期的資本家が、一、商品の販路を獨立小生産者——ギルドの親方であれ、職人であれ、また農民であれ、——より遮斷し、二、且つ高利貸的な前貸 verlag の機能によつて、かれらを自己に依存せしめ、また生活資料（後の賃銀部分）以外の原料・道具等の所有權を喪失せしめ、もつて自ら事實上の産業資本家となり、從來の獨立小生産者を事實上の賃銀勞働者たらしめるところの形態」をとる。かゝる「經營形態」の本質的特徴は、「第一に、その生産過程がまだ資本家の所有にかゝる一大職場において營まれずして、各家内工業者の所有にかゝる、農村乃至ギルド傳來の職場において分散的に遂行されることである。第二、資本家が直接に『素面』の産業資本家としてあらわれずして、一應商業資本家として各家内工業者に對立し——もつとも進んだ形態にても——生産手段（原料および道具）が前貸なる形で供給せられることである」（＊同、三四頁）。なお、この場合次の三事實が注意されねばならぬ。第一、これらの家内工業勞働者の間には問屋資本家を組織者とする」分業にもとずく協業」が成立しうる、この場合には本來のマニュファクチュアに「近迫」している。第二、とくに都市の「家内工業者」ギルド親方の職場の規模が擴大されて、「獨立性」を恢復しマニュファクチュア資本家となる場合（イギリスやオランダの羊毛工業）と、そのまゝ獨立性を恢復せず後の「苦汗制度」のようになる場合とがある。第三、「問屋制」資本には前期的商業資本制があるから「それ自體は舊來の生産方法をむしろ自己の存在の前提條件として維持する傾向をもつ」。だから「眞の資本家的生産（マニュファクチュア・工場）の發達にしたがつて廢滅に歸せねばならない。即ち『問屋』商人自身がマニュファクチュア所有者となるか、あるいは先述の如くその中にはらまれた『初期のマニュファクチュア』がかゝる組織を破壞するに至る力である」。そうでないと、「苦汗制度」として殘存する（＊同、三七—三八頁）。

第二の形態は「マニュファクチュア」である。氏によれば、「これが眞に前進的な形態、眞の資本家的生産方法である」。「問屋制家内工業」と對比した場合の特質は、第一、範疇としての「賃勞働」の成立、第二、「資本家の所有にかゝる「職場における協

業」とその内部における分業である。注意すべきは、このマニュファクチュアはギルド的小職場の否定として、「單純な資本家的協業」「初期のマニュファクチュア」の展開の結果である。

三、右の引用によつてもわかるように大塚氏にあつては二重の經路は、相互に對立し闘爭するものと考えられている。もともと、氏にあつては産業資本と商業資本とは、きりはなされて社交せしめられているがゆえに、これは當然の歸結である。だから、二重の經路は、商業資本＝保守かゝ、産業資本＝進歩が、したがつてまた「問屋制資本」＝保守か「マニュファクチュア」＝進歩かというふうに提出される。しかし、いまわれわれにとつて、問題となつているのはマニュファクチュアの相互に相異る重の經路である。二つの道は共に、資本制生産様式の形成、マニュファクチュアの發達に、したがつて歴史の「進歩」に通ずる。すなわち、生産手段の孤立的分敗的な零細私有は少數の資本家の所有に轉化せしめられ、生産のの社會化がおしすゝめられ、勞働者階級による社會主義のための物質的・精神的諸條件がつくられる。

ところでマニュファクチュアの基本的特徴の一つは、産業資本と商業資本との密接な結合ということだ。兩者の發達は反比例するが産業資本の段階的發展という前向きの見地に立つとき、小營業の段階においては産業資本に對して商業資本が壓倒的に支配し、マニュファクチュアの段階では兩者は絡みあつており、大工業の段階においては産業資本が商業資本を自己の法則の下に屈服せしめる。いま、「大塚」史學の前には産業資本主義の「序說」・「系譜」を求明するという課題があたえられている。つまり、産業資本と商業資本との關連、産業資本がいまだ手工業的技術の上に立つているがゆえに商業資本によつていんぺいされている賃勞働と資本との對立がばくろされなければならない。しかるに「大塚」史學は、せつかく豐富な資料を狩渉しながら、階級闘爭の見地に立つマルクスの理論を方法論として徹底させずに、商業資本＝「問屋制家内工業」と産業資本＝「マニュファクチュア」とをきりはなし「對立」させてしまう。

そして、マルクスの「二つの道」の理論の「例外」を發見する。

四、産業資本と商業資本との反比例、マニュファクチュアの發展段階・經濟構造に於ける兩者の結合、共に資本主義を歴史的におしすゝめる二つの道についてのマルクスの「古典的」理論を、右のように誤解しながら、大塚氏はきりはなした二つの道と形態とをつぎのように「組合」せる。すなはち、氏はいう——

「前期的資本の産業資本への推轉は右の二形態をもつが、かゝる推轉をとげる道もまた二つの方向をもつている」（*同、四一頁）

氏はこゝで、突然商人が事實上の産業資本家になる道（つまり、氏のいわゆる「前期的資本の産業資本への推轉」の道）と生産者が商人となる道との、つまり、マルクスが指摘している二つの道とを想起する。そして、つゞける、「この推轉の二つの道において、いずれの場合にも『問屋制家内工業』および『マニュファクチュア』のいずれの形態をも採りうる」（同、——傍點は豐田）というのだ。しからば、「二つの道」・「二つの形態」の問題はいづれでもよいということになり、その方法的意義は見失われてしまう。

マニュファクチュアは一言でいえば、分業にもとずく協業である。その發生からいえば、いわゆる小營業の段階の直接的必然的結果である。そして、工業における資本主義がこの小營業の段階からマニュファクチュアの段階に發展する場合、二重の經路が可能である。一方では、若干の勞働者を有する作業場が徐々にその内部に分業を採用し——家内的協業は最初の分業だ——、その結果、資本家的單純協業が資本家的マニュファクチュアに轉化する。これに對して他方の商人が事實上の産業資本家になる經路がある。マルクスのこの指摘は、レーニンより、ロシアの資料にもとずいて一層具體化された。

小營業者（農民）は絶えずその中から買占人＝商業資本を分出する。商人は農民層の財産分化（個々人の掌中における自由な資金形成）を前提し、かつ、小商品生産の分散性・孤立性と擴大される市場との矛盾を解決するものとして出現する。商業資本は小營業を小販賣に對する大販賣の優越という純經濟的法則にもとずいて支配する。商業資本の小商品生産に對する支配の第一のもつとも單純な形態は、商人（または、大作業場の經營主）が小商品生産者の製品を買入れることである、この場合、多くは商人は地方の獨占的買占人であり、買入價格をむやみに引下げる。第二の形態は高利貸業との結合と債務者の債權者に對する人身的隷屬、第三の形態は製品にたいしていろいろな商品で支拂う第四の形態は小商品生産者が生産上必要とする商品で支拂う、この場合にはかれらへの加工原料の販賣が專問的商人によつて遂行されることもある。なおこの場合、小商品生産者は製品市場からのみでなく原料市場からも遮斷されてしまう。第五の最高の形態は原料その他を小商品生産者に前貸して賃加工させるところの「資本制家内勞働」の創出である。そもそも、商業資本と産業資本との相違は、前者が同一の商品を利潤を得て販賣するために買入れるにたいし、後者は商品を加工された形で販賣するために商品（原料その他・勞働力）を買入れることにある。ところで、第五の形態は、小商品生産者は自宅で資本家のために働く事實上の賃勞働者となる。このように商人を頂點とする「資本家的家内勞働」は小營業の段階においても散在的にみられるがマニュファクチュアの段階において廣汎に採用される。

さて、かゝる最高段階に達した商業資本が、これらの小營業者をして部分勞働あるいは製品別分業を行わしめるようになれば、その商人が分業をともなう大作業場をもとうともつまいと、全體としての生産機構は商人を頂點とする分業にもとずく協業というわけになる。ここに、商業が事實上の産業資本家になるという經路がある。

ここで、「大塚」史學にたいして、われわれの主張したいことは、商業資本の「進歩」性であり、世界市場を目的とする生産という點から出發しても、また世界市場から來る生産諸條件をもつて始めるという點から出發しても、いずれの道をたどつても、はじめから商業を基礎とする生産諸部門が開始されるということだ。

五、「大塚」史學が商業資本＝「問屋制家内工業」が「反動性」・「保守性」をもつと、一面的に强調するとき、引用する典據の一つは、「資本論」のつぎの有名な諸指摘である。

「資本が商人資本として獨立優勢的に發達すること、生産が資本の下に從屬せしめられないこと、換言すれば、資本が一つの外來的な、それ自身から獨立した社會的生産形態の基礎の上に發達すること、意味を等しうしている。それ故、商人資本の獨立せる發達は社會の一般的な經濟的な發達と逆比例する」（「資本論」、第三卷、下卷、二八七頁）。これを産業資本の發展といふ觀點からいえば、「商人資本の獨立した發達が資本制生産の發達程度に逆比例するという法則」（同、二八七頁）として集約しうる。

商業は既存の使用價値を目當とする歴史的な生産諸體制にたいして分解的な影響を及ぼす。「しかし、商業がいかなる程度まで舊來の生産樣式を分解せしむるに至るかは、まず舊生産樣式の堅固さと内部的組織のいかんとにかかわる。で、この分解過程がどういう結果をもたらすか、換言すれば舊來の生産樣式に代つてどんな新しい生産樣式が出現するかということは、舊生産樣式そのものの性質のいかんにかゝわることだ。古代世界においては、商業の作用と商人資本の發達とはつねに、奴隷經濟に結果した。また、起點のいかんによつては、直接的生活資料の生産を目當とする一の家父長的奴隷制度に轉化するというにすぎぬこともあつた。近代世界においては、それが資本制生産樣式に結果してゆく。そこで、これらの諸結果そのものは、商品資本の發達とは全く別個の諸事情によつて制約されるものだということになる」（同、二九〇―二九一頁）。

「商人が直接に生産を掌握する。こののちの經路は……歴史的にはいかに推轉として作用するとはいえ、それ自身においては舊來の生産樣式を革命するに至るものでなく、むしろそれを保存し、自己の前提條件として維持する。それゆえ、たとえば十九世紀の中葉になつてもなお、フランスの諸工業、イギリスのメリヤスおよびレース工業における製造業者は、多くはたゞの名目上の製造業者たるにすぎず、現實上は、單なる商人にすぎなかつた。かれは機織業たちをして舊來の分散な仕方で勞働を繼續せしめ、事實上かれ自身のために勞働しているこれらの機屋たちの上に、商人としての支配だけを行つていたにすぎなかつた」

（『資本論』第三卷、上、二九三頁）。そして、「このやり方はどこでも、現實的資本制生産方法の妨げとなる。で、資本制生産方法が發達するにしたがい、それは廢滅に歸する。それは生産方法を革命することなくして、直接的生産者達の位置を單に惡化せしむるだけであり、かれらおび資本の下に直接に從屬せしめられている人々よりもより不良な諸條件の下に立つ單なる賃銀勞働者およびプロレタリアートに轉化せしめ、舊來の生産方法の基礎に立つてかれらの剰餘勞働を占有する」（同）。

以上において、マルクスはつねに産業資本の形成・發達という前向きの觀點から問題を提出している。この發展的見地に立つとき、産業資本商業資本とは「反比例」する、というのだ。つまり産業資本がいまだ手工業的技術の上に立つており、野蠻な中世的諸關係によつてからまれているような未熟な發達段階においては、商業資本が産業資本＝小營業にたいして「獨立優勢的に」發達している。もちろんその支配は高利貸・債權奴隷・獨占・商略・僞瞞・掠奪などによつて直接生産者にたいしてより破廉恥な（産業資本よりも）搾取と壓迫とを加えている、だからといつて商業資本そのものが、産業資本の發達のどんな段階においても、そうであるとはかぎらない。また、それが産業資本＝小營業のそれ以上の發展を「阻止」する「反動性」をもつなどとはいえない。封建制の胎内において自成的に形成される産業資本の發達を「阻止」し壓迫するものは、決して流通上の「支配者」ではなくして、生産上の支配すなはち基本的な生産手段たる土地の所有者である。封建的大土地所有とその權力である。商業資本は産業資本の形成にたいして「阻止的」「反動的」であるどころか、促進的であり進歩的である。それは、すでにのべたとおり論理的にも歴史的にも資本制生産の不可缺な前提條件をつくる。たゞ、それは流通上に機能する資本にすぎぬゆえに、舊い生産體制を腐朽させ破壞せしむることはできても、新しい生産様式（生産力と生産關係との統一としての）を創出することはできぬ、せいぜいそれが「資本制家内勞働」を創出するとしても直接的勞働者達をして「舊來の分散的な仕方で勞働を繼續せしめ」、「舊來の生産様式の基礎に立つて剰餘勞働を占有」するに過ぎない。しかし、われわれはこのような商業資本の小營業者にたいする最高の支配形態は「歴史上推轉として作用する」こと、換言すれば、それが事實上の賃勞働と資本とをつくり、マニュファクチュアを組織し、大工業への前段階を準備することを忘れてはならない。だから十九世紀のロシアの工業について、レーニンはつぎのようにのべたのだ——

「家内制大生産は工業の資本主義的形態である。ここには資本主義的形態のあらゆる徴表が現れている。——即ち、すでに高度の發展段階にある商品經濟、個々の個人の掌中への生産手段の集積、自分の生産手段を所有せずしたがつてまた他人に勞働を給付し自己のためにでなく資本定のために働く多數の勞働者にたいする收奪が現れている。營業の組織からみて、家内制大生産が純然たる資本主義であることは明白である。大機械工業に比較した場合の家内制大生産の特徴は、技術が發達していないこと（これは主として甚だしく低廉な賃錄によつて説明される）、勞働者が微少な土地經濟を維持していることである」（「人民の反とは何ぞや」十邦譯、三八〇頁）。「資本制生産による勞働の社會化とは、人間が一つの空間において作業すること（これはこの過程の一小部分にすぎない）とはかぎらない。それは、資本の集積にともなつて社會的勞働が專門化され、與えられた各産業部門における資本家の數が減少し、特殊産業部門の數が增大することである。それは、多くの分散的な生産過程が融合して一個の社會的生産過程となることである。……今やより一層專門化された各産業部門においては、資本家の數はますます減少する。このことは生産者間の社會的關聯がますます鞏固になり、生産が集結して全一體となることを意味する」（同、三二四頁）。

さらにレーニンは社會主義のための鬪爭という觀點から、資本主義の進歩的な「歴史的使命」についていう——。

「資本主義は勞働を社會化すると同時に、過程そのものゝメカニズムによつて、『勞働者階級を教育し、統一し、組織し』、鬪爭することを教え、勞働者階級の『反抗』を組織化し、『收奪者を收奪』するため、政權を奪取するため、また生産手段を「少數者收奪者」の手より全社會の手に移すべく、この生産手段を收奪するため、勞働者階級を統合するのであるが（『資本論』）、マルクスはこのことの中に資本主義の進歩的・革命行爲を見出した」（同、五五二頁）。しかし、「何のために——とレーニンはナロードニキを批判しつゝいう——この『使命』を工場勞働者の數によつて判定するのか？　もちろん、プロレタリアートの革命運動

が、工場勞働者の數、勞働者の集中、かれらの發展程度等に依存することには議論はない、しかし、すべてこのような點は、資本主義の『統一的意義』を工場勞働者の數に歸着せしめるということを正當化するものではない」（同、五六四頁）。そして、さらに「『手工業の普及と共に、各地方の農民はぞくぞくと現代の工業運動の中へまきこまれる。手工業を通しての農業地方のこの革命化は、かつてイギリス及びフランスにおいて行われたよりもはるかに大なる廣さにわたつて、ドイツの産業革命を擴大せしむるのである。このことによつて、イギリスおよびフランスとは反對にドイツにおいて革命的運動が、何故にもつぱら都市的中心地に局限されずに、國内の廣汎な廣さにわたつてかくも有力に普及したかを説明せられる。このことは、またこの運動の平靜な、强固な、抑うべからざる生長を説明する。小都市の大多數および農村地方の大部分が變革のために成熟した時に初めて首都および他の大都市における勝利ある蜂起が可能となるであらうことは、ドイツにおいては明白の理である」（エンゲルス「住宅問題」「序文」）というエンゲルスのことばを引きつゝ「『資本主義の統一的意義』ばかりでなく、さらに勞働運動の成功が、工場勞働者の數のみに依存せずに手工業者の數にも依存している――」（「人民の友とは何ぞや」、五六六頁）と結んでいる。

封建制生産様式から資本制生産様式への轉化のための歴史的諸條件、とくに封建的大土地所有の根本的かつ徹底的「清掃」があたへられ、「現實的生産様式」＝現實的産業資本の形成・發達が行われると、商人が生産を掌握するという經路、「問屋制家内工業」の形態は「廢滅に歸する」ことは當然である。しかし、資本家階級が封建的大地主と妥協し、その本質において封建的地主的な絶對主義國家權力が産業資本の發達を自己の利害に從屬せしめ適應せしめようとするところにおいては、チープ・レイバアおよび、勞働者と微細な土地經濟との結合を前提とする、「問屋制家内工業」が廣汎に殘存せしめられ、そのまま大産業資本や獨占資本のための巨大な生産機構に轉化せしめられる。

いずれにしても、この道は賃勞働をつくり、大工業への道を準備する點で「歴史上に推轉として作用する」のである。

六、産業資本および商業資本の内面的聯關にたいする「大塚」史學の右のような誤り、この狹義の經濟學上の誤謬は、さらに廣義の經濟學上の、從つて歴史の運動法則そのものにたいする精神主義を生んでいる。流通＝前期的資本の運動を生産＝産業資本の運動からきりはなしてとりあつかい、流通の中に運動の法則――それが「阻止」的であれ「保守的」であれ――があるかのように考えている「大塚」史學は、産業資本の自己運動を産業資本と商業資本との交互作用としてしまう。氏は産業資本＝資本制生産の中に眼を向け、資本主義の自己運動の原動力をその中に内在する基本的矛盾・敵對的對立に求めることが出來ない。逆に、氏は運動の原動力をそれにとつて外部的な「第三者」對立物の統一者に求める。

いったい、氏は個別的産業資本家にとらわれているがゆえに、資本主義的生産關係を個々の資本家の目的である「營利」に現象化すると共に、資本主義的生産力をその目的を實現するための手段としての技術・經營に一面化してしまう。氏は、このようにきりはなしてしまつた「生産關係」じつは「營利」と、「生産力」じつはマニュファクチュア技術とを結合するために、「第三者」によらざるをえない。そして、「大塚」史學が一般的に個別的資本家の見地にとらはれているのみでなく、特殊的には小商品生産者ないしマニュファクチュア資本家、すなはち氏のいわゆる「中産的生産者層」の（不安な）動搖的地位を反映しているかぎり、市場との關係において絶えず分解しつつある小商品生産の地位を、全商品經濟體制の見地から考察することができず、個々の商業資本の獨占的支配を非難し呪詛しつづけると共に、永遠の「精神」にての魂の救濟を求めざるを得ない。

このような發展し流動して止まぬ資本主義社會にたいする個別的現象的見地と、これを安定し固定化しようとする小ブルジョア的見地とは、「營利」と「技術」とを「精神」・「倫理」を媒介とする「主體」という個人的現象のうちに統一せしめるのである。現象的なものを本質的なものに還元し、逆に抽象的なものから具體的なものを再構成すると

いうプロセスと、現象的なものをそのまゝ美型化し（「近代的人間類型」）固定化し、たゞ現象を詳細に記述し物語るというプロセスとは異つている。「大塚」史學が、「中産的生産者層」という、あらかじめの資本制生産の本質を理解し目的と手段とをあらかじめ統制的意志のもとに統一しているような、「理想的」な「人間類型」をつくり出し、それが資本制生産を「推進する」というふうに、資本主義社會の發展を敍述するとき、讀者は具體的なものと現象的なものと混同し、このような「大塚」史學の敍述が何か唯物史觀よりもヨリ具體的であるというような錯覺におちいつてしまう。

勞働者階級の觀點よりすれば、資本の歴史的發生とは、「直接的生産者（奴隷および農奴――豐田）からの收奪を、換言すれば、生産者自身の勞働に立脚した私有の解體を意味する」（「資本論」、第一卷、下、七五五頁）、「この收奪は一連の暴力的方法を包含するものであつて、その中の劃時代的なものだけを、われわれは資本の原始的蓄積の方法として考察したのである。直接的生産者からの（生産手段および生活資料の――豐田）收奪は、無慈悲きわまる兇暴をもつて、もつとも恥すべき、もつとも醜悪な、もつとも卑劣にして忌わしき慾念の衝動の下に遂行された。己れ自身の努力によつてえたところの、いわば個々獨立した勞働團體とかれの勞働條件との融合に立脚するところの私有は、他人の形式的に自由な勞働の搾取に立脚するところの資本制的、私有によつて驅逐される」（同、七五五――六頁）。かくてマルクスはのべた、「資本制生産方法の『永遠の自然律』を展用せしめて、勞働者と勞働條件との分離過程を完成し、一方の極においては社會的の生産手段および生活資料を資本に轉化せしめ、他方の極においては民衆を賃勞働（近世史の人爲的産物たる自由な『勞働貧民』――（イギリス法律にあらわれたことば――豐田）に轉化せしめるためには、この種の思いきつた努力を要したのである。貨幣がもしオージェーのいうごとく『一方の頰に生來の血痕をおびてこの世に來つた』ものであるとすれば、資本は頭の天邊から足の爪尖にいたるすべての万孔から血と汚物とを滴らしつつこの世に來たつたといえる」（同、七五四頁）。

これに反して、「大塚」史學においては、資本は工業と農業との、生産者と生産條件との「幸福」な結合としてかすかすの「德性」のにない手として讃美されつつ、プロテスタンティズムのバラ色の祝福と共に生誕する。

――一九四七・八・二〇――